

THE WORLD FILMeX

映画を見れば世界がわかる

Vol.5

ジョアキン・ペドロ・デ・アンドラーデ監督
『マクナイーマ』(1969年ブラジル)



第9回東京フィルメックス(11月22~30日)は、有楽町朝日ホール他で開催。アンドラーデ特集ではこの他に、艶笑コメディのスタイルで鋭く社会を批評した『夫婦間戦争』など全5作品を上映。

ブラジルの監督としては、古くはカンヌでバルム・ドールに輝いた『黒いオルフェ』(マルセル・カミュ、59)、グラウベル・ローシャ、ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス、近年では『セントラル・ステーション』(98)のウォルター・サレスや『ブラインドネス』(08)のフェルナンド・メイレルスの活躍も見逃せない。

になったと無邪気に喜ぶ。ある時には洪水で家族が飢餓に襲われたり、またある時には街で警察や役人とギャングに牛耳られた社会を目の当たりにして当惑したりと、ストーリーは加速度を増して展開していく。

この映画にはマリオ・デ・アンドラーデによる原作があるのだが、とにかくぶっ飛んでいる。社会批判や矛盾、また歴史や時代を映し出しながら、金への執着や怠惰の定義が、時代と共に変化するような描写も見逃せない。自由な発想のパワーが全開している。色彩の艶やかさ、派手さが目にしみるが、ラストにはヒラニアより怖く、そして美しいものが待ち構えている。凄い。

この映画から見えてくるのは、濃い色彩や奇抜で不可思議なストーリー展開だけでなく、物事が混在しながらもその混在を容認するブラジルの懐の深さではないかと思える。

その奥深さは、ブラジルという混血多人種による国そのものの独特な歴史と成り立ちが、大きく関与しているのだろう。東京フィルメックスでは、2度のワールドカップ制覇に貢献し、サッカーの神様ペレと並び称された名選手ガリンシャを描いたドキュメンタリー『ガリンシャ』も上映する。ポリオの影響で左右の足の長さが異なるハンデを背負いながら活躍した国民的英雄、ガリンシャ。ブラジルの奥深さは、とにかく刺激的である。

(林加奈子/東京フィルメックスディレクター)

大雑把に分けると先住民のインディオ、ポルトガル人を

中心とした欧州からの白人、そしてアフリカからの黒人。移民に寛容なブラジル社会は人種間の混血が進み、現在人口1.8億人余り。コーヒーなどの農業だけでなく、石油・鉄鉱石やアマソンの天然資源から環境問題まで話題に事欠かない。

今年ブラジルへの日本人移民100周年。10月後半開催のサンパウロ国際映画祭では、岡本喜八特集が上映される運びとなり、日本でも東京都現代美術館では10月

22日~11月12日まで「ネオ・トロピカリア:ブラジルの創造力」展と題した面白そうな企画もある。

そして第9回東京フィルメックスでは、ブラジルの秘宝、ジョアキン・ペドロ・デ・アンドラーデの短編を含む5作品を、日本で初上映することになった。

代表作『マクナイーマ』(69)を紐解いてみよう。私が『マクナイーマ』に初めて出会ったのは、2004年の春、カンヌ映画祭の回顧上映部門での修復版上映だった。上映の冒頭で修復版のスポンサーとして、国営石油会社、ベトロブ

ラスのロゴがドカンと出てくる。

最初の場面から衝撃的だ。いきなり出産シーン。しかも産まれたマクナイーマは黒人の大人で、周囲から醜いと言われる。彼を産んだ母親が「Mで始まる者は災難だ」なんて言いながら、名前はMで始まるマクナイーマと名付けられる。

時はバワフルに進み、6歳になってもマクナイーマは喋らず、ハンモックが連なる部屋では下で眠る母親にオネネヨを引っかいたりしている。ところがある日、森の中で一瞬にして童話の王子さまのような姿に変身、彼は美しい白人